国家と人間の政治学

――民主社会主義者・中村菊男の思想的考察――（六）

清滝仁志

五　伊勢志摩と中村政治学の形成

1　伊勢志摩と古代史解釈

中村菊男はたびたび赤福餅を持参し、故郷の伊勢志摩を話題にしていたという。この地は彼にとって追慕の対象であるばかりか、具体的な現実政治に向き合ってきた場でもあった。本稿では歴史文化研究と政治分析の二つの点から、政治学者中村菊男における伊勢志摩との関係について探っていきたい。中村はさまざまな本を出したが、亡くなる二年前に出した『伊勢志摩歴史紀行』（一九七五年）は異質の本である。専門の政治学でなく、いろいろな資料を用いながら、故郷の伊勢志摩の歴史と文化を解説している。執筆のために現地に何度も足を運び、文中からも故郷の愛着をうかがい知ることができる。巻末に自身推奨の観光コースも挙げていた。松阪の牛肉屋から伊勢神宮、朝熊山（あさまやま）、鳥羽、賢島（かしこじま）と巡る。世界の名所旧跡よりも郷里の観光コースが一番で

あるとさえといっている。[1] 伊勢志摩の山河を愛でる気持ちは強く、中学三年の「山頂より」という作文では朝熊山からの光景を次のように描いた。

…遥に遠く北は飛騨三越の峻峯より南は潮岬の辺迄渺として端なし。まなじりを極めて正南を見渡せば紀路の遠山渺々として大海の奴濤の如く前に飜り千波後に立つ如し…[2]

天下の絶景と評するこの山に少年時代、たびたび登り、お堂で一泊して濃い味の豆腐の味噌汁の朝食を食べたという。[3] 美しい郷里の少年時代からの思いの集大成を書物にしたのであった。

中村はこの書を「ありきたりのガイドブックでもなく」、「学問的裏付けをもつよう心がけて書いた」という。[4] 故郷の歴史を通じ、日本の政治文化の原点を明らかにしていた。彼の専門は明治以降の政治史であるが、日本人論を通じて、政治文化の研究に発展していた。そのことから歴史をもっと「マクロ（巨視）的視角」からみなくてはならないと考え、古代・中世研究にいたった。地元の伊勢神宮は古代史の重要な対象であり、神道は日本人に影響を与え、その特徴を探るうえで欠かせない。伊勢志摩の探求は研究と連関していた。[5] 故郷を題材にして、政治を形づくった日本人の行動様式や社会・文化を検証しようとした。自身でこの書を「郷里と深いつながりをもつ一人の研究者の愛情をこめた書物」といっていた。[6]

伊勢志摩は神宮に代表されるように古代史にとって重要な場所である。中村はこの地を具体的に検証するにあたり、同時代の古代史研究のあり方を問題にしていた。彼は日本政治史研究の主流を占めた歴史学研究のあり方に批

判的であった。マルクス主義の影響を受け、社会法則や進歩史観にこだわり、個別の事象や具体的な人間の生き方に目を向けないことを問題視した。古代史について門外漢であり、この本での論述の多くは他の学者の研究に依拠しているが、故郷の歴史を通じ、自身なりの歴史解釈を披露した。

一九七〇年代は古代史がブームとなっていた。一九七二年に奈良県明日香村の高松塚古墳から壁画が発見され、世間の注目が集まり、歴史家の社会的発言も目立つようになった。松本清張などの著名作家も邪馬台国の謎を解き明かすべく、次々と著作を出していた。

戦後になって古代史研究は政治的制約から自由になった。以前、『古事記』や『日本書紀』は疑うことができない歴史書とされ、神話は歴史的事実とされた。この歴史性に疑念を表明した津田左右吉（早稲田大学教授）は教職を失い、刑事訴追まで受けた。戦後はこうした桎梏から解放され、学問的な立場からの研究が進められるようになった。しかし、戦前の反動で古代史にもマルクス主義の影響を受けた歴史学が入ってきた。階級や政治支配・被支配の視点が強調されるようになった。

中村がとくに問題にしたのは、古代史ブームの半面、『古事記』や『日本書紀』を否定することが学問的・進歩的・科学的とする風潮であった[7]。記紀にこだわらない研究が進歩的であり、逆は反動的とされた。それに対し、中村は歴史研究にイデオロギーが入ることを拒絶する。進歩的とか反動的ということは歴史解釈の基準でないとした[8]。

このような風潮の象徴として中村が指摘したのは津田左右吉の扱いである。津田は自身における記紀の研究を歴史研究でなく、物語の研究と位置づけた。そのことが「右翼の狂信的学者やマスコミが騒ぎ出した」原因になったが、戦後になると「左翼のものがこの問題をとり上げるようになった」という。とくに家永三郎（東京教育大学教授）

が文部省検定を違憲とした教科書裁判において津田の名前を挙げ自説を展開した。彼は裁判において記紀の『神代』の物語はもちろんのこと、神武天皇以後数世代の間の記事に至るまで、すべて皇室が日本を統治するいわれを正当化するために構想された物語である」との記述が削除されたことを不当とした。この記述は「津田左右吉博士の著名な研究によって明確に立証されており、今日日本史を専攻するほとんどすべての学者が肯定している」のであり、削除は「古事記、日本書紀の記述をそのまま史実と誤解せしめる」し「史実に基かない非科学的な歴史の学習を期待しているものというほかはない」とまで言明していた。[9] 津田は記紀が物語であるとしたものの、天皇支配のイデオロギーとまで言ってはいない。戦後の「科学的」歴史研究が津田の主張を自説に引きつけたものであった。[10]

津田は戦前戦後を通じ、記紀を古典として研究してきた。それを戦前は右翼が攻撃し、戦後は左翼が賞賛した。中村は「こういった問題にたいする世間の取り上げ方はいかにも騒々しく事実をよく突き止め、事の真実を確かめようとしないでとにかく自分勝手な解釈をこころみる傾向にある」という。[11] 戦後の古代史学者によれば、津田の学問は「政治的圧迫のために十分発達できなかった」のが「発展的に継承」され、「すぐれた構想力によって」、「古代国家成立史を再構成する方法に確立された」という。[12]

中村はこうした学問的態度を日本人の一般的傾向と結びつけた。「権力がもつ側が強大なときには一言も抵抗もおこなわない」のに「それが弱いとみたり、あるいは事がおさまってしまい権力をもつ側がやったことに対して批判がおこると、いっせいに騒ぎ立てるきらいがある」と指摘した。[13] 中村は学問研究をめぐるイデオロギー闘争を否定した。歴史解釈はあくまで事実に忠実であり、事実がどのように動いたかを明らかにすべきであるという。記紀については、戦前の絶対化、戦後の全否定という態度でなく、歴史上の常識からある程度信頼できるものを取り上

げ、解釈を加えていくべきとする。歴史の記述にあたって「あくまでも事実に忠実でなければならず、事実がどのように動いたか、それがどうであったかを明らかにすべきものである」という。[14]

同時代の邪馬台国ブームにも記紀を排除した歴史解釈として疑念をもっていた。七〇年代から八〇年代にかけて、古代史家のみならず、一般の人々も邪馬台国がどこにあったのかを論じていた。正史『三国志』のうち魏志における倭人の記述に対し、さまざまな解釈を施しながら、その位置をいろいろと推理した。中国史の二千字の一記述が『魏志倭人伝』とあたかも一冊の書物のように扱われ、岩波文庫にも収録されていた。中村は自国の古典をおろそかにして、外国の古典をもとに延々と議論を展開することに批判的であった。当時の中国が日本よりも文化水準が高かったといえ、海路遠く離れ、交通不便な外国から予備知識のないまま見聞をまとめたのであり、正確性に問題がある。このような性格をもった文献に対し、一字一句まで見逃さず検討しながら古代史を書くことに否定的である。原文の記述が誤っていたならば、それにもとづいて書くと間違いであり、「一種の想像による創作をやっていることになる」という。古代史は「百人研究家がいると百人、それぞれ解釈がちがう」ものとなり、「ますますわからなくなってしまう」と断じた。[15] 一時は世間で非常に盛り上がった邪馬台国であるが、歴史学が発展した現在、あまり論じることがなくなった。

古代史ブームで邪馬台国とともに注目されたのが、江上波夫（東京大学教授）が唱えた騎馬民族征服説であった。日本人の祖先は大陸からの大規模な民族移動の結果であるという。当時すでに歴史学者から疑義が出ており、中村もまた賛成できないとした。彼はいくつかの経路から数世紀をかけ人間の移動がおこなわれ、だんだんと融合し、日本民族が形成されたと考えた。大和地方に国家が形成され、それが広がって日本列島全体がヤマトになっていっ

たという説を支持した[16]。

記紀の記述を無視する古代史学は、その後、大化の改新の否定などにも及んだ。歴史資料が少ないことから、イデオロギー的史観からの推測（「構想力」などと言い換えている）も入りやすく、中村の記紀のこだわりは歴史学における実証主義の危機を感じたことにある。戦前、戦後を通じたイデオロギー優位の歴史学を拒否したのである。

2　伊勢神宮の起源と日本人の政治文化

国家形成は伊勢神宮の起源にも関係する。『日本書紀』には神宮の記述が存在する。崇神天皇（第十代）の時代に疫病や叛乱が起きたことから、宮殿に祀っていた天照大神の御神体を大和の笠縫邑に祭り、さらに垂仁天皇（第十一代）のときに大神が「是の神風の伊勢国は、常世の浪の重浪の記する国なり。傍国の可怜し国なり。是の国に居らむ」とのたもうて伊勢に鎮座したとある。これに対し、直木孝次郎（大阪市立大学教授）が異説を展開した。彼は古代史の新しい解釈を次々に提示し、ブームを牽引した一人である。家永裁判にもかかわり、記紀の史料批判から独自の国家成立史論を展開した。

直木は伊勢神宮の起源を『日本書紀』における崇神・垂仁朝でなく、もっと後の五世紀後半の雄略朝（第二十一代）前後かそれ以後に下らせ、天皇の国家支配と連動させる。神宮は伊勢土着の神社であり、皇室と結びつくことで昇格したという。伊勢における太陽神と結びつけることで皇室の政治支配を正当化したという解釈であった。

中村はこの新説が実証性に欠けるとしている。政治支配下に入った地域の土着神が昇格したことを他の例と比べて不自然とみた[17]。伊勢は大和と往来があり、太陽の昇る東方に位置することで、この地に天照大神の御神体を奉遷

したと推測した。大和朝廷の権威が確立した時期であり、やはり書紀のいうように崇神・垂仁朝の頃という。[18] 農業国家であった大和国家において天気を支配する太陽は重要であり、太陽の昇る場所にあこがれたのでないかという。[19] 直木の土着社昇格説は政治支配に目を向けたユニークな解釈であったが、仮説に過ぎず、書紀の記述を否定するまでに至らず、現在でも定説となっていない。

伊勢神宮を語ることは皇室の性格に目を向けることになる。なぜ神宮が「神様の王座をしめるようになった」のか。右派も左派も国家権力と結びつけるが、中村は伊勢信仰の背後に政治支配をみることに懐疑的である。彼によると、鎌倉幕府成立以降、権力は幕府に移り、天皇は権威の中心に過ぎなくなった。それ以前も天皇親政は限定的であった。天皇は権威をもち続け、権力がなくても国民から尊崇を受けていた。天皇は天照大神の子孫とされ、祭祀をつかさどり、その権威と伊勢神宮が連関していた。[20] 伊勢信仰は古代・中世において皇室、天皇制度と密接に結びついていたが、鎌倉時代以後、だんだんと庶民のものとなり、徳川時代、完全に庶民の信仰対象となったという。[21] 明治以降、「天皇制国家体制」の教育によって伊勢信仰が全国に普及したのでなく、すでにその前から一般庶民の間でつちかわれていた。[22]

中村によれば、伊勢信仰の普及・拡大は国家による直接の庇護や財政的援助でもなく、一般庶民の間において信仰組織が全国的に拡大したからであった。そこには御師（おんし）と呼ばれる神官の積極的な活動があった。時代が下って皇室の力が落ちると、神宮は独自に運営せざるを得なくなり、御師が「伊勢暦」を手土産に全国行脚し、檀家を中心に参拝を勧奨した。暦は農業社会において貴重なものであった。日本各地において庶民は伊勢講をつくり、団体で参拝旅行をおこない、御師は伊勢で彼らを饗応した。伊勢信仰は御師の努力と受け入れる側の庶民の講

によって拡大・発展し、江戸時代には半年で四百万を越える者を一時に動員する吸引力をもつまでにいたった。[23]

中村は政治学者として伊勢信仰に日本人の特性をみていた。参宮は信仰のみならず、物見遊山の遊びがついており、庶民の間での人気につながった。伊勢には赤福餅や二軒茶屋餅などの銘菓に加え、さまざまな土産物があり、古市には日本有数の遊郭もあり、参拝の楽しみになった。伊勢参詣は地域でこぞって出かけたのであり、団体旅行の走りであった。中村は日本において団体は「無礼講が行われ、不作法となり、酔っぱらいがでる」という。外国人と違って「心理的なものが一枚加わる」ものであり、「一種の雰囲気ができ、空気がかもし出され、無責任になる」という。[24] 選挙運動などに通じる現象として考えたのであろう。また参拝の邪魔をすると祟りがあったり、参拝者に功徳があるなどの因果応報譚があり、「庶民の道徳」が伊勢信仰を通じて日本人の道徳的観念となっていることにも着目していた。[25]

さらに徳川時代における大規模な御蔭参りについて政治心理学的に注目した。中村は政治史において日本における「集団エクスタシー現象」にしばしば言及しているが、その原点であった。何度かピークがあり、半年の間に数百万人が伊勢に集結したこともある異常現象であった。社会経済的要因や政治的要因は理由として十分でなく、非合理的で理屈のつかない現象という。もっとも全国における御師の活動や講組織があり、伊勢参拝の地盤はできていた。その上で、地方相互のコミュニケーションが疎遠な環境にかかわらず、一時に人々がこぞって参拝したのは伊勢神宮のもつ伝統的な吸引現象というほかなく、「日本人の体内に潜む民族的個性である集団エクスタシー現象」が噴出したという。社会経済的理由で絶対に説明がつかない「社会心理的ないし社会病理的な現象」であった。さらにこの現象に対応し、地元の者が参拝者に奉仕をするという集団的な施行（せぎょう）がおこったことも日本人

の民族的個性とみていた。「相互扶助的な意識のあらわれ」、「日本の〝むら〟社会の特徴」であるという。[26] 中村は「集団エクスタシー現象」を自由民権運動や国体明徴運動、そして安保改定騒動などで観察していた。御蔭参りの尋常でない熱狂を聞いていた中村は理屈で説明のつかない非合理的な集団現象もあることを理解できた。そして日本人の特性に結びつけたのであった。

3　研究の原点としての本居宣長

伊勢志摩の土地柄はナショナリズムと親和的である。伊勢市には今も神都という別称がある。中村は出身者としてイデオロギー的視点でなく、地元の民俗文化を通し、歴史を説明した。松阪出身の本居宣長についての記述もそうであった。宣長は国学者として戦前、称揚され、「しきしまの大和心を人問はば朝日に匂ふ山ざくら花」という和歌は広く知られた。中村はこの大和心の「こころ」が戦争中唱えられた勇武な心でなく、もっと女性的なものという。「ぱっと咲いてぱっと散るようなエネルギーが瞬間に爆発するようなもの」であり、それも散り際のみの美でなく、「もっと広く大きな、種々相を含んだ美」とし、「ものはかなく、めめしきこころ」という。[27] 国粋主義的な宣長でなく、松阪（当時は松坂）の商家に生まれ、京都で遊学した経験を重視した。それは平安朝文学の関心につながり、大和心が女性的なものであると論じた。生涯の大半を松阪で過ごした宣長は郊外の山室（やまむろ）に墓所を自ら選定したが、山上にあって伊勢の海を臨むこの地の景色こそ、「物のあはれの説を述べ、詩歌の真意義をはじめて明らかに認められた」彼にふさわしいという佐々木信綱の文章を紹介している。[28]

本居宣長は中村の研究者としての出発点でもあった。慶應義塾の予科三年（一九四一年、昭和十六年）の頃、ナ

ショナリズムが高揚し、「日本精神もの」が多く出ていた。彼は「それらを読んでも浅はかな気がして馴染めず」、「古典そのものを原文のままで読んでみよう」と考え、『古事記』、『日本書紀』から『万葉集』を読んだ。そして夏休みに「本居宣長の生涯と思想」を題材に論文を執筆した。鳥羽に生まれ、宇治山田中学校に通った彼に松阪や宣長はなじみ深かった。論文作成のため、旧居鈴廼屋（鈴屋）や山室山の墓所を訪れ、関係者に話を聞き、松阪市図書館で宣長関係の著作をひも解いた。予科会（慶應義塾予科生の自治団体）の懸賞に応募し、入選した[29]。評者であった文芸評論家の河上徹太郎はこの論文を「引用文の巧妙さとやまと心の着実な究明とで特に推薦するに値する」と称賛した。この宣長研究の後、「平安朝文学のやわらかい調子がたまらなく好き」になり、生涯の専門であった日本政治史に関心をもち、慶應の歴史家であった手塚豊の下に出入りするようになり、歴史研究に着手した[30]。

「本居宣長の生涯と思想」は十六頁の短い論文ながら、後年の研究者としての活躍を予感させる内容である。皇国史観全盛期に代表的国学者を取り上げたにもかかわらず、時代の雰囲気をあまり感じさせない。

この時代、皇国史観の原点ともいうべき国学者を取り上げる以上、天皇との関係について言及しないわけにはいかないが、中村は宣長が追求した「古道」の目的と研究を分け、後者に重点を置いている。「古道」の説明は当時の言論状況を踏まえた記述になっている。宣長の「古道」は「古事記及び日本書紀の記述に対する絶対の信念」、「神話に対する情熱的な信仰」があるとした。この信念は「理性的な批判反省を加へず」、「究理作為の結果を交へるものではなかった」という。そして彼にとって記紀の記述が「天照大神の御後裔である萬世一系の皇室の御栄により絶対に真なりとし、一点の疑義をさしはさむべからずとした」と解釈した[31]。皇室との関係はこの程度の言及にとどめた。議論の中心は「古道」の内容でなく、研究者としての宣長の古典解釈であった。

中村は政治学研究において人間に焦点を当てたが、この論文でも宣長の人間性に注目していた。京都遊学時代、平安朝文学を研究しながらも「青年血気の儒生生活として自由奔放の趣あり」という面に触れた。「観劇は最も嬉び、酒席の享楽も解し、喫煙も深く嗜んだ」のであり、豊かでない家計にかかわらず、遊学に送り出した母から品行を戒められていたという。[32] 当時、畏敬崇拝された国学者の遊蕩にも言及したことに人間観察者たる中村らしさがあろう。もっとも人間的側面と文学解釈の関係を示唆程度にとどめたのは時代的制約であろう。宣長が国学者として大成したのは「緻密な頭脳及び飽くなき研究心の宥和」に加え、「其の個性の特殊性に基く」といっていた。つまり「文化都市松坂に生れ、洗練されたる文化人としての教養を体した」ことを評した。[33]

中村は宣長が契沖の文献学研究と賀茂真淵の古学研究という「思想的潮流を良く取捨選擇し、攝取し、融和し大成し得た」とする。この総合にあたって文化人宣長の柔軟な発想に注目していた。「古道」の研究方法において「師の説を妄信する事なくあく迄も真理を重んじ、進歩的なれとの毅然たる態度」の唱道や「在来の秘伝口授」の排斥を評価する。慶應での研究者としていろいろな師をもち、門下生にも自己の学問を強要しなかった自身の態度にも通じる。また宣長が温和な性格のため、その学問が実践的性格をもつにいたらなかったと実践的な平田篤胤の国学と分けて考えた。儒学を排斥しつつも契沖の文献学をも尊重し、古書の理解のために漢籍を読むことを勧めたことに「宣長の学問の寛容さと包容力を偉大さ」をみていた。[34]

「古道」についてはナショナリズムよりもその本質に着目した。「人間の性情に従って生ずるもの」、「人間の持つ自然の欲求や本能」である。それを探求するのに「儒学の主智主義や主観的成心」を排斥すべきという。人間一般に普遍的なものであり、その認識を儒教や仏教が妨げたという。「富貴を願ひ、生を楽み、恋愛の情を現はす」こ

とが「人間の真情」とし、それにもとづいて行動すべきという。中村はこの「真情」を「適当の自制心を持つ観念」と解釈した[35]。

また宣長が文学解釈で強調する「物のあはれ」は「人間の喜怒哀楽の感情すべて」であり、「「理智」や「意志」を排して、「感情」は人生の根柢なり」と解釈した。それは「単に自然的な感情ではなく、寧ろ或る程度自然の感情を克服した寛容な純粋なもの」である。この「物のあはれ」を理解することで「古人の高雅な性情を知り、古代文化の真髄を掴む」のである[36]。

以上のように宣長の文章を引用しながら、皇国中心主義や感情的なロマン主義を避けた筆致といえる。河上が巧妙な引用を評価したのはこの点にあったのであろう。もっとも宣長解釈は思想研究として途上であろう。しかし松阪という地で活躍した先人をイデオロギーでなく、人間性に着目し、その学問的意義や概念の本質を探ろうとした研究は後の政治学研究に通じるものがある。

4　中村菊男の皇室観

伊勢志摩の地は中村の皇室観の形成にかかわった。戦中、本居宣長や国学をイデオロギー的に解釈することなく、戦後、天皇擁護を自身の選挙で公言したのも、この地に生まれ育ったことにある。皇室は理念的にとらえるのでなく、若き日から奉迎でなじみのある存在であった。

中村は天皇について積極的に自分の意見を表明し、『天皇制ファシズム論』、『嵐に耐えて　昭和史と天皇』の著作を出した。前者は天皇制が戦前日本の超国家主義をもたらしたとする丸山眞男などによる議論を実証的に批判した

ものであり、後者は天皇を中心に戦前の昭和政治史を描いたものである。

中村は一九二八年（昭和三年）十一月二十日、新天皇の伊勢神宮御参拝の奉迎に参加した。前日から宇治山田に泊まり、朝四時から参道に集まった。姿を目にしたのはほんの一瞬であったが、小学三年生にとって「荘厳華麗な盛儀で子供心にもその光景が強く印象づけられた」という。「なにか「大日本帝国の」極盛期を見たような気がしてならない」と振り返っていた。即位の大典に際し、伊勢では旗行列や提灯行列が毎日続き、「お祭りのような毎日たのしい日が続いた」という。当時は田中義一内閣のころであり、同年の二月に第一回の普通選挙がおこなわれた。後に県会議員となった父が尾崎行雄の支援者であり、政治会合を自宅でたびたび催し、中村も選挙に関心をもったという[37]。伊勢神宮には皇族や有力政治家がよく参拝し、歓迎のため動員させられていた。

政治学者として昭和天皇のことを書きたいと思ったのは、『原田日記』（原田熊雄述『西園寺公と政局』）を読み、天皇と大臣、軍人、政治家、財界人などのさまざまな人間模様が率直に描かれていることに関心をもったからであった。戦後になって天皇の動静は知られるようになったが、この本は歴史的事件における天皇の具体的な判断や行動を明らかにしたものである。臣下が「情勢分析や判断に、迷いやくるいがあり、はっきりしない場合が多い」のに対し、天皇だけが「その都度実に適切な判断を下されている」ことを発見した。中村は、自身の政治史研究を踏まえて、昭和天皇が昭和政治史の中でどのような役割を演じ、どんな人柄か、なぜ戦争を食い止めることができなかったかを「自分の角度で解いてみる」ことを試みた[38]。

中村は天皇の理性を高く評価していた。「国の政治には理性が必要である」にもかかわらず、昭和の政治において「あまりに非理性的要素が強く、心情的なものが多く支配し、優先した」のであり、狂信と結びついて国家を破

滅に追いやったという。その中で「ひとり天皇だけが理性の灯を最後まで持ち続けた」のであり、この天皇が「終戦までどうしようもなかった」事情を明らかにした。[39]「〝むら〟意識が強く、セクト的」で「〝むら〟内部の分裂をおそれる」という「日本人的なものの考え方」によって、望まぬ対米戦争を臣下が一致して合意し、立憲君主の天皇はそれを尊重せざるを得なかった事情を説明した。[40] 人間中心に政治史を分析するのが中村の政治学の特徴であるが、天皇をも人間的分析の対象にした。執筆当時もデモクラシーと天皇が相いれないという主張や天皇の戦争責任を問う声はまだ強かった。保守陣営でなく、社会主義政党のブレインがこうした天皇像を広く世間に訴えた意義は大きい。

民社党関係者や支持者は、自民党に比べ、天皇や皇室に親しみがあるとは言えない。西尾末広のように議員として戦前、皇居での招宴に参加した例外はあるが、労働運動家には即位の大典の際に予備拘束された者さえいた。河合栄治郎の門下生など社会思想研究会の人々をみても天皇を特別に評価していた者はあまりいない。中村の世代以降はとくにそうである。民社党が革新野党であり、綱領に天皇についての記載はないものの、大喪の礼の党首参列など、皇室に対する畏敬の念を表明していたのは、中村の啓発活動の影響もあったのではないか。[41]

『伊勢志摩歴史紀行』は地域の歴史を語る中で、さまざまな人物について触れている。先述の本居宣長、戦国武将の九鬼嘉隆、作家の江戸川乱歩、梶井基次郎、三島由紀夫、詩人の伊良子清白、真珠王の御木本幸吉などである。単なる偉人伝でなく、その人間性にも言及している。宣長の京都での遊蕩の話や鳥羽水軍の名将九鬼嘉隆が朝鮮外征では負けていたことにも触れた。御木本幸吉は中村も小学生の頃、目にしていた人物であるが、「ひとの意表に出る頭脳の持ち主」という面に着目していた。「機知というか、ユーモラスというか、他人の思ってもいない意表

にでることがうまく、人を人とも思わない、いわゆる「人を喰った態度」」がその特徴であると評した。[42] さらに伊勢の斎王から古市や「はしりがね」の女郎にまで言及するのは人間に興味をもちつづけた政治学者らしい内容である。[43]

中村の地元愛は格別であり、名古屋のラジオ局で一九六六年から一年間、毎週日曜日に三重県ゆかりの名士と対談する番組をもっていた。計五十二人と話し、その内容を後に伊勢の赤福本舗の創業二百六十年の記念に出版した。地元と人間に関心を寄せた彼ならではの仕事であった。[44]

5　政治評論の基礎となった調査研究

中村は政治評論をも手掛けたが、現実政治の経験の上に立つものであった。戦後第一回の衆院議員選挙に出馬し、鳥羽市最初の市長選挙で父の選挙参謀を務めた。そして一九五四年十二月の父の初当選後、翌夏（一九五五年七月）から六年間にわたって慶應義塾大学法学部政治学科の学生を率いて鳥羽市で政治実態調査をおこなった。当時、社会調査さえあまりなされておらず、政治に応用するというのは画期的であった。中村は選挙実態調査会で日本初の選挙調査の経験があり、さらに政治学や社会学の社会調査の理論を導入して調査にあたった。[45] 各集落で約三百名を抽出し、調査員（演習学生や助手など）が質問票による面接質問をおこない、聞き取り調査で補うものであった。

この調査は政治を地域社会の文化や社会構造との関連でとらえようとした。そこでは次の三つの問題を観察していこうとした。第一に政治と家族、同輩集団、血縁・地縁集団といったローカルな社会集団との関連である。明治以来の近代化が地域の「自然村秩序」による支援を期待し、それを温存していたことに着目している。第二に国家

的規模で機能する公的制度が地域社会に浸透することにともなう地域社会の適応や抵抗である。公的諸制度が封鎖性を保ってきた地域社会に導入された場合の影響である。第三は都市化にともなう急速な社会変動の政治に対する影響である。市町村合併で中心的都市を核心とする周辺地域の都市化、地域社会の統合が背景にある。これは封鎖性の強い地域社会が次第に姿を消し、統合しているという日本全体の地域社会の変容が念頭にあった[46]。

この調査は自身の演習での活動であり、堀江湛、中村勝範（いずれも後の慶應義塾大学教授）との共同研究であった。報告論文の執筆は主に彼らにゆだねられていた。研究の視点もまた共同の問題関心である。中村らしさは、地域社会の産業構造と社会構造を究明し、その中でも基本的人間関係の様式に焦点を当てていたことである。調査対象は両構造の相違から選定された[47]。

鳥羽市は中心街（鳥羽町）が小規模で、島や山を隔てた多くの集落によって構成されていた。諸集落は散在しており、中村が選挙で廻った際、風俗や言語が各地で違っていることを実感していた。最初の二年はパイロット・スタディとして、答志島の桃取（ももとり）と伊勢神宮に供えるアワビの採集地の国崎（くざき）を調査した。その後、本格調査として安楽島（あらしま）、小浜（おはま）、松尾を選定した。安楽島は半農半漁、小浜は純漁村、松尾は純農村であったのが、鳥羽町の通勤兼業地帯に転化しつつある集落である。この三つは対照的な村落として選ばれた[48]。遠隔の孤立集落で面談調査が可能であったのは選挙で地元を訪れ、地域事情や有力者を知っていた中村ならではであった。この三地域の結果を踏まえて、中心である鳥羽町の政治意識をも調査した。

調査は、毎回終了後、すぐに論文として公表された。第一回の一九五五年七月の調査後、九月には雑誌『都市研究』に掲載していた。この論文では中村による鳥羽市での直近の選挙分析が概括的に述べられている。とくに市長選や

県議選では浮動票が増えたことに注目していた。地方には有力者の「顔」「地盤」「金力」がものをいう「古い伝統的な紐帯の残存とそれに伴う意識の停滞」があるが、それに反発する有権者の意識も芽生えていると指摘した。それは中村が闘った市長選での実感でもあった[49]。もっとも市議選は「地もと」の利益を主張する「親戚選挙」であった。県議選では労働組合の委員長が予想外の一位当選を果たし、「大衆の素朴なレジスタンスのあらわれ」はあったが、「地もと」の熱心な支援によるものであり、革新のイデオロギーが支持されたわけでないという[50]。現地の実態調査はこうした選挙結果をもたらした政治構造や住民意識を探るものであり、都市化が進展する地域社会の変化の実態を明らかにするものであった。

最初のパイロット・スタディでは、孤立的封鎖社会における住民の政治関心の薄さを実体験した。桃取では無言で何も答えない者など調査不能者も目立ち、漁村の伝統的な政治的無関心に直面した[51]。国崎は所得が平均し、「えらい金持ちも貧乏人もない」地であり、「困ったことなし」との回答者が二〇%を占めた。政治的関心は薄く、政治の認識は「住民の意識の中における伝統的感情や流れ込む漠然とした風聞の中につかんでいる感情」であった[52]。両地域ともに伝統的産業の従事者がほとんどで工場通勤者が皆無の地であるのは後の調査地域と異なっていた。

この調査では全体の終了後、各地域の結果を総合して分析したわけでない。後に諸論文を著書にまとめた際も手を加えていない。それぞれの地域分析であり、その重点も違っている。この調査で各地に共通し、目立った点を挙げてみる。

第一に周辺地域では生活が表面的に都市化したようにみえて、伝統的社会構造が根強く残っていることである。集落内の血族結婚（安楽島）[53]、集落内で選挙投票を厳格に割り振りする〝棟割り〟（小浜）[54]、厳しい年輩序列の寄老会・

中老・若者の三集団の存在（松尾）[55]である。第二に政治的態度に「農漁民型」と「通勤型」という二つのタイプが確認でき、前者は明確な政治意識をもった者が少なく、後者は社会党支持が圧倒的に多い。第三に通勤者といえども伝統的社会構造の共同体的規制が根強く、労働組合が機関決定をしても組合員の投票に必ずしもつながらず、革新政党の伸び悩みとなっている[56]。鳥羽町でも有力労組の組織票が三分の一にしかならないとの証言もあった[57]。

以上のことから投票は社会構造と人間関係の影響が強く、イデオロギーの影響は限定的であった。左派社会党の衆院議員といえども出身地の農家による人肥汲み取りの人間関係で他地域に支持を獲得していた（小浜）[58]。地域内では特定の候補者を強く支持するオピニオン・リーダーが信頼するサブ・リーダーを集め、彼らが地域社会の入り組んだ人間関係の網の目をたどって、各戸を説得するという方式（松尾）が有効であった[59]。

こうした分析に加え、小浜では年三回の調査で、地域の社会変動による権力移動の実態を詳細に分析していた。戦前の零細沿岸漁業に依存する封鎖的孤立社会では、指導者は集落内を統制できる名家出身者であったのが、鳥羽町中心の地域圏に社会的・経済的に組み込まれた後は、対外折衝能力が求められ、個人的資質が重視されるようになったという。この分析は農漁村地域の権力形態の変革過程を一般化する意図があり、「社会変動の実験室的な研究」と位置づけられていた[60]。

調査において、進歩的憲法と近代的議会制度にもかかわらず、国会議員が地域の社会構造や慣行によって規定される人々の非近代的意識の上に選ばれる問題が指摘されている（松尾）。日本の政治を研究するにあたって、政治制度を対象にする以上に政治社会学、政治心理学的分析の必要性を訴えていた[61]。戦前以来の政治制度論でなく、人間を中心にした現実政治の探求は中村が新しい政治学として力説しており、ゼミナールの指導方針でもあった。

地域調査研究は回数を重ねる中で方法を確立し、以後、門下によって学問的に精緻化された。鳥羽での調査経験は（右派）社会党や民社党のブレインとして現実政治に参画した中村にとって、革新の理念と日本社会の現実との距離を計る上で重要であった。西欧の民主社会主義理論を唱道しながらも、それを受け入れる日本の政治文化や日本人の行動様式に関心をもち続けたのは、政治を具体的に把握する必要性を認識していたからであった。中村は政治の世界について「人間の非合理性が最もよくあらわれる」とし、「人間が矛盾に満ちた行動をする」と断言したが、[62] 選挙や調査の裏打ちがあったからであろう。鳥羽の政治調査は研究生活にとって思い出深いものであり、一九七四年夏にかつて一緒に調査にあたった演習卒業生と一緒に伊勢志摩を旅行した。九月以降も一人現地に残って『伊勢志摩歴史紀行』のための取材を始めた。[63] 伊勢志摩は中村の政治学者としての成長の場を提供していたのであった。

中村は父の選挙ばかりか、市政も支援していたと地元では取りざたされていた。中村幸吉市長は鳥羽市の国際観光都市としての発展に貢献した。市長選の立候補には老齢と政治から長く離れていたことで心配する向きがあったが、三期十二年で、公共事業の充実により鳥羽市を発展させた。「事業欲に生きた男」、「死ぬまで公共事業のために生きようとする執念があり」、それを貫いたと息子は評した。[64] 中村が調査に出かけた集落も開発の恩恵を受け、様変わりした。地方の一市長では難しい事業も多く、中央政財界に人脈がある息子の影響力もあるのでないかと言われた。[65] 政治調査をはじめ、父との連携があり、政治学者の中村にとって、現実政治の検証の場として地元の存在は大きかったのではなかろうか。

注

（1）新幹線で名古屋経由から近鉄特急で松阪の「和田金」のすき焼きを味わい、伊勢の外宮・内宮参拝の後、赤福を食べ、朝熊山にドライブで鳥羽宿泊。箱田山、波切の大王崎から眺望を楽しみ、賢島ホテルでウナギを食べ、「合歓（ねむ）の里」に泊まるなど具体的である。中村菊男『伊勢志摩歴史紀行』（秋田書店、一九七五年）二四八頁。鳥羽の観光開発に中村の父（中村幸吉鳥羽市長）が尽力し、彼もまた協力したこともあり、特別の思い入れがあるのではないか。

（2）『中村菊男先生―その人と業績―』（東京菊友会、一九七三年）一一頁。

（3）『伊勢志摩歴史紀行』一三九－一四〇頁。

（4）前掲書、三頁。

（5）前掲書、二四五頁。

（6）前掲書、三頁。

（7）前掲書、一二頁。

（8）前掲書、一六頁。

（9）第一次裁判の訴状（一九六五年）による。

（10）津田は左翼の天皇批判とは無縁であった。戦後、雑誌『世界』が皇室批判を期待して津田に論文執筆を依頼したものの、意に反する内容のため、編集部がわざわざ彼の見解に反駁する文を加えたことがあった。

（11）『伊勢志摩歴史紀行』二二頁。

（12）直木孝次郎「井上光貞君を憶う」『歴史との出会い　追憶と随想』（社会思想社、一九八四年）一〇八頁。

（13）『伊勢志摩歴史紀行』二二頁。

（14）前掲書、一六頁。

（15）前掲書、一二－一三頁。

(16) 前掲書、一九頁。
(17) 前掲書、二四－二五頁。
(18) 前掲書、二八－三二頁。
(19) 前掲書、一七－一八頁。
(20) 前掲書、四九－五〇頁。
(21) 前掲書、二四六頁。
(22) 前掲書、八八頁。
(23) 前掲書、五二－六一頁。
(24) 前掲書、六二頁。
(25) 前掲書、七八頁。
(26) 前掲書、八六－八九頁。
(27) 前掲書、一五二－一五三頁。
(28) 前掲書、一六一－一六二頁。
(29) 中村菊男『学生生活方法論―学習・リポート・ゼミ―』（慶応通信、一九七四年）一五二頁。
(30) 『伊勢志摩歴史紀行』一五二頁。
(31) 前掲書、二五頁。
(32) 中村菊男「本居宣長の生涯と思想」『予科会誌』（慶應義塾予科会、一九四一年）第二二号、一八頁。
(33) 前掲論文、二三頁。
(34) 前掲論文、二四頁。
(35) 前掲論文、二六頁。
(36) 前掲論文、二八－二九頁。

（37）『嵐に耐えて―昭和史と天皇―』（ＰＨＰ研究所、一九七二年）一五－一八頁。
（38）前掲書、二－四頁。
（39）前掲書、二五〇－二五一頁。
（40）前掲書、一四五－一六五頁。
（41）没後、門下の中村勝範は民社系の雑誌で、中村を「静かなる天皇敬愛者であった」と評している。中村勝範「中村菊男　人と思想（三）」『改革者』（政策研究フォーラム）一九七八年四月号、一一四頁。
（42）『伊勢志摩歴史紀行』二二二－二二三頁。御木本と中村の父はそれほどの親交はなかった。他の県議に金を渡したが、彼にはくれなかったという。訪問して昼食を一緒にすることもあまりなかったという。『回想の中村幸吉』（私家版、一九六九年）六三－六四頁。
（43）実家の海産物問屋の仕事の関係で小学生から船に乗り、女郎買いの青年の話を耳にしていた。母はそれを軽蔑していたこともあり、その方面の興味はなかったようである。前掲書、一一頁。
（44）中村菊男『伊勢路を語る』（赤福、一九七一年）参照。赤福と中村は関係が深く、企業化した際の初代社長の浜田ますと親交があり、『赤福のこと』（赤福、一九七一年）でも社長の話をまとめている。『伊勢志摩歴史紀行』六六－六九頁。孫の益嗣二代目社長は慶應在学時代に中村の家で世話になっていたという。浜田益嗣「弔辞」『中村菊男先生研究ノート』（慶應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会Ｂ、一九七七年）二八頁。
（45）堀江湛「中村先生の政治的業績」『中村菊男先生研究ノート』二〇頁。
（46）中村菊男編『日本における政党と政治意識』（慶應義塾大学法学研究会、一九七一年）五－七頁。
（47）前掲書、七頁。
（48）前掲書、七－八頁。
（49）中村菊男「地方政治の構造と今後の課題」『都市問題』（東京市政調査会）第四六巻第九号（一九五五年）、五五頁。
（50）前掲論文、五六－五七頁。

(51) 前掲論文、五八－六一頁。
(52) 中村菊男・中村勝範「地方選挙人の政治意識―三重県鳥羽市國崎町における実態調査―」『法学研究』（慶應義塾大学）第二九巻第一〇号（一九五六年）一－三一頁。
(53) 『日本における政党と政治意識』二九－三二頁。
(54) 前掲書、一〇五頁。この投票決定に従わないと厳しく糾弾されたという。戦前は票の予想はほぼ計算通りであったのが、だんだんと予想できなくなったという。前掲書、一〇六頁。
(55) 前掲書、一九〇－一九一頁。
(56) 前掲書、三二頁。
(57) 前掲書、二六一頁。創価学会の動員力は労働組合を上回り、「驚くべきもの」と評している。
(58) 前掲書、一一九－一二一頁。
(59) 前掲書、二一八頁。
(60) 前掲書、九五頁。
(61) 前掲書、二一四頁。
(62) 『学生生活方法論』一〇〇頁。
(63) 『伊勢志摩歴史紀行』二四九－二五〇頁。
(64) 『回想の中村幸吉』八八頁。
(65) 幸吉市長は朝熊山の伊勢志摩スカイライン建設にも尽力し、鳥羽と愛知県の渥美半島との架橋をも構想していた。中村もこの観光道路を推奨し、架橋計画も知悉していた。どれだけ市長の開発構想に加わっていたかは定かでない。